

生き方の研究から

店仕舞いの研究へ



中西 喜彦

一、最近の心境

八十三歳の誕生日を過ぎ、二月以来の新型コロナウイルス騒動と六月からの長雨にすっかり行動が制約されている。ついつい来し方行く末を考える。男性の平均寿命が81歳になつたと聞くが、5月、7月と学部は違えども大学1年の時から今までお付き合いのあった友人が亡くなつた。同じ学部で大学、大学院、就職した大学も同じ大学のM君も一昨年亡くなつた。確かに平均寿命とは言いえて妙だ。人の評価は棺をおおつて後定まると言う

が皆さん立派な人生を送られたと交流を振り返ると本誌投稿の筆が進まない。

所が6月中旬YouTubeに三峡ダムが危ないとの報道が出た。下流の武漢、南京、上海が水浸しになりそうだという。既に上流の重慶はかなり水浸しになっているところがあるという。その時、寒気(さむけ)のような不思議な感覚を味わつた。新型コロナウイルスで苦勞した武漢の人達はどうなっているのだろうと思う。1931年の長江大洪水では約400万人が死亡したといわれている。

それ以来気になつて気になつて、毎日YouTubeと睨めっこして、三峡ダムの水位を調べている。これまた筆が進まない。マスク一つとっても中国に8割も依存していた現状をみると、中国の病害、水害、さらに蝗害の日本に及ぼす影響は想像を絶する。

最近の動画を見ていると自動車や家がぶか

ぶか浮かんで流れてゆく。これでは歴史の継続性など夢のまた夢。ガラガラポンで一から出直すと、被害が一段落後、新しい王朝が出来るのだろう。岡田英弘博士の言われる「盗賊団中国共産党王朝」の命運も70年で先が見えてきた。

一方、米国も11月の大統領選挙を巡ってトランプ氏対バイデン氏の最後の戦いが繰り広げられている。藤井厳喜氏の解説によると米国の白人層の中には宗教の自由を求めて、英国から米国に渡ってきた層と、ユダヤ系金融資本のロックフェラーやロスチャイルド家を中心に国際金融連合と言われる層の2集団があるという。それに、黒人層、メキシコ人、アジア人が加わる。既に第二次大戦開戦時のルーズベルト大統領から国際金融連合が差配する大統領に変わっているという。

米国ファーストと連呼するトランプ大統領

をみると少し奇異に感じるが、この75年間米国では、日本を抑え、ソ連を助け、中国を助け、米国の産業のかなりの部分を中国などに移すなど、グローバルな対応で国際金融連合は儲けてきた。実は米国人も農業や工業を始め生産業で職を奪われていたのである。前者の代表が民主党バイデン氏、後者が共和党のトランプ氏というわけである。

所詮我が国も米中の狭間の中で生きて行くわけである。表題の生き方の研究から、店じまいの研究を考えたが三峡ダムが決壊を考えると馬鹿馬鹿しくなった。どんなに死に方を工夫しても5分水に浸かれば確実に死ぬ。人生いつ死ぬか分からぬ恐怖に怯えるより最後まで生きる努力が大切だと思った。

二、米国と中国での所感

米国に行つて驚くのは歴史のない国ということである。52歳の時ウイスコニン州立

大学マジソン校に5ヶ月ほど国外研修が出来た。州庁舎の一部にある博物館に行った。驚いたことにいきなり80名の幌馬車隊2組でこの地に来てインデアンと戦いこの地に住みついたことが説明されている。

ここは酪農で有名で北海道の酪農はここをモデルにしたと言われている。北大の教官や雪印の社員もこの大学に研修に来ていた。

また、近くの町には酪農博物館と酪農神社(Dairy Shrine)があり、酪農神社には昔使われていた日常的酪農での道具、博物館の方には足こぎの搾乳機や乳脂肪の測定装置などが陳列されていた。牛の人工授精器具などもあった。既に我が国ではよりスマートな器具機材が改良され使用されているのを見ると31年前のことだが我が国の模造力と工業力の力に感心したことがある。

一方、ワシントンでスミソニアン博物館に

行くと月面着陸したロケットや各国の戦闘機などが展示してあり、米国の科学力を見せつけてくれた。

また、米国ではギリシャ文明、ローマ文明の後の中世の文明は否定して米国に移住したので、過去の歴史はない。星条旗の前で米国憲法を遵守することを誓えば原則的には米国人になれます。この75年間は軍事技術を上させ、世界を押さえつけてきました。

コロラド州に牛肉生産地の実情を視察に行ったことがある。日本では肥育用子牛をセリで売買するのに、一頭ずつ選んで値段を決めている。コロラドでは集団の糞の状態でその群の値段を決めると言う。糞の性状を見るとその子牛群がどんな牧草地で飼育されたかわかり、当然子牛の成長具合がわかるという。飼料のトウモロコシは野積みで3×20×2(メートル)ぐらいで置いてある。年間総

雨量は500ミリと言うから可能なだろう。牧草の収量と年間雨量は高い相関があるらしい。一肥育会社で管理する牛の頭数は75万頭だった。

これに対して中国は4000年の歴史を持つといいながら、異民族が興亡を繰り返したもので、現在の中国共産党政権は建国70年の国に過ぎない。その前の清朝は満州族によって作られたもので継続性はない。瀋陽の清国の発祥の地を見学しても瞠目するものがあった。逆に旧日本國統治時代のホテル、郵便局などが目についた。

一方、秦の始皇帝が残した兵馬俑坑の規模には驚嘆した。しかし、秦の始皇帝の子孫は秦氏を名乗って我が国の色々な地域に住んでいる。不老長寿の薬を求めて始皇帝の命令でわが国を訪れる徐福伝説は鹿児島から青森まであるが、一番有名なのは京都の平安京でし

よう。

また、能楽もその系統を引くもので能楽の大成者と言われる観阿弥や世阿弥親子の先祖は秦氏の系統だと言う。我々が常用する漢字を考案した種族は3世紀までに絶滅し、支那の代表的国である隋や唐に取って変わられている。彼らは牧畜系の鮮卑族が母体である。

その後はアジアとヨーロッパを繋いだと言われるモンゴル族の元、満州族を主体の清になっている。ここでは、和や清貧の思想が育つことはなく、「今だけ、銭だけ、自分だけ」の世界になるようだ。

最近のDNA解析による男性特有のY染色体分析の結果、その表現遺伝子型の種類が中国や韓国などではバラツキが少なく、我が国は多様性があると言う。両国では男性は殺されるか、日本に逃げて来たのかも知れない？

我が国は山に恵まれ、かつ四方を海に囲ま

れた温帯地帯に位置している。山の麓は田んぼや畑が作られる。中国の今度の病害、水害、蝗害の凄まじさを見てみると、このような自然環境の中を生き抜いた盗賊集団の頭目や宗教団体の司祭が天命と称して作った国だったとの感慨を新たにしている。

三、能は筆者の道標（みちしるべ）

能「花月」は花月少年が7歳の時、福岡県添田にある霊峰英彦山の麓で天狗に攫われ、九州、四国、本州の霊山を連れ回され、最後に京都の清水寺門前で楽器「鞆鼓」を打ち鳴らしながら寺の由来を語っている。そこに息子を探して父親が現れ親子の再会をする。二人は仏道の修行とともに旅たつと言う筋書きである。

筆者は警官だった父の転勤で、小学校入学までに5回転居、小学校を5回転校した。その間、空襲後の田舎への単独疎開も経験した。

中学、高校とも1回ずつ転校し、それぞれその間1回下宿を経験した。大学、大学院をへて鹿児島大学に就職して、やつと38年1箇所に着けた。

しかし、この間、35歳の時、東京築地にある国立がんセンター研究所に一年間下垂体や卵巣ホルモンの測定法を習得のため内地留学した。また、52歳の時米国ウイコンシン大学マジソン校に海外研修を5ヶ月と英独仏に1ヶ月の研修を行った。

これらは自分から強く希望したというよりも何か天狗のようなものに引き回されたような気分を持っている。

「取られて行きし山々を思いやるこそ悲しけれ——」

この山々のなかで筆者の在職中の38年と退職後の10年間に訪問した山は大変有意義なことを教えてくれました。

四、八重山の茅に始まり麓の茅門に至る。

○ 入来牧場候補地測量が初仕事

筆者が入来町浦之名を初めて訪問してから56年になる。同じ浦之名でも入来院家のある麓ではなく、八重山の斜面で標高517メートルの標識をもつ大学牧場建設予定地である。助手として、赴任3ヶ月目の昭和39年7月である。当時22軒の開拓農家が入植していた約100ヘクタールの牧場予定地の実面積をコンパス測量で測量するためである。

林学科で測量学を担当しているH助教授を測量者にO助教授と小生、それに学生3人で測量を行った。既に廃墟となっている開拓農家の住居跡に一週間寝泊まりして、事に当たった。ポールを二人で一本ずつ持ち片方がメモリの付いたロープを引っ張って進み、測定者はその距離と位置を確定する作業である。結果的に333本の標識を立てて紙面に架空

の平準化した平面図とその面積を表示した。予算が認められると、入来町役場の担当者と農業工学科で測量学実習を担当していたS助



鹿児島大学入来牧場全景

手と筆者の3人で境界線を接する地主の方と問題がないか確認作業を行った。

特に、測量では刈り払いと称して測量する場所の周辺を2メートル位の幅で草や枝を切り払ったところを移動するのである。しかし、それを外れると凄い茅の茂みで、身の丈より長く、7日間茅場を泳いでいるような感覚を味わった。この後は平成25年号(第9号)に詳しく報告している。

○茅門を訪ねて10年

まさか、最初の入来訪問から46年後に再び茅の歓迎に会うとは。茅門をくぐる縁繋ぎになった「入来薪能」に感謝する次第である。

貞子さんの町おこし計画は平成10年に澁谷氏下向750年の一連のイベントを成功させ、平成11年に入来薪能を開始されている。能舞台製作、演目選び、チケット販売、能興行の難しさ満載の中大変なことを成功させて



入来院夫妻と著者 平成22年(2010年)3月撮影

居られる。さらに、JR川内駅前能「鳥追舟」の親子像まで設置されている。

これは筆者の想像でしかないが、県民交流センター（能舞台）が平成15年に設置されているので、平成11年から始められた入来薪能は何らかの刺激になったのかも知れないと思っっている。

以上のような事で、入来町浦之名（八重と麓）は大変重要な修行の場になった。

五、おわりに

この十年間多くの場面で、「貞子さんに再会」して来ました。今年は小生の所属する宝生流皓月会発足50周年記念の年に当たります。さらに、鶴丸城御楼門復元が三月に完成したことも祝って祝賀能を思い立ちました。

演目は能「俊寛」。平安時代末期、時の宰相清盛の怒りを受け、薩摩の鬼界島（現在の三島村硫黄島）に流刑になり、ご赦免舟が来ても

本人だけは許されて居ないと言う悲劇です。

この演目は入来薪能で上演された能「鳥追舟」と二曲だけが鹿児島を舞台にして作られたものです。入来薪能の時チケトを振込用紙とともに郵送して貰った記憶があります。今度は自分がその役をする羽目になりました。祝い事なので、ご当地ものとは言え悲劇ばかりではと、前座に子供仕舞でお目出度い「猩々」を舞って貰おうと子供の募集、稽古場所の確保とこの新型コロナウイルス拡大防止の難題の中仲々大変です。しかし、貞子さんの苦勞に比べればたいしたことはないと思いに納得しています。

その節、貞子さんと共に苦勞された重朝庵主と長女久子さんに祝賀能にご来駕頂けることになり嬉しい限りです。 完

（鹿児島県文化協会理事、鹿児島謡曲連合会会長、鹿児島大学名誉教授）